

供儀の船——Sに

小岡明裕

Elle est retrouvée !

Quoi? l'éternité.

A. Rimbaud

眼、濃霧の街。
見ることをやめて、ひねもす、石に眼のことは刻む。
幻視のはての失明、ちりぢりの虹の夜。
風が来て、またしても霧、たちこめる。

I

七つの海。七つの空。

薔薇色の矢印が旋回している白い地図。

水晶の權。

眼の埠頭へ、もりあがり疾駆してくる無数の白馬のたてがみ。

背後では、あんずの薄衣を着せかける弓なりのイリスの息づかい。



わたしは、愛する。

暁の向こうの黒々とした野生の薔薇、背の高い不妊の女を。

だが、海の雲母の場所が夏至の槍に貫かれるときを風の傾斜で測ってみれば、季節はずれの大鎌が、森の寶石の屋根から漆黒の青みを切り剝し、船という船を泡立つ緑の獣の方へ押し流したばかり。大橋帆の蝙蝠を飛び立たせる法螺貝の響。

游泳にふさわしい浅い水の上での睡り。月下の暗礁。

しぶく海の上に、壮麗な寺院を建てるのは誰か。

やがて夜明けの粘液とともに、失われた時が滲み出してくれば、女は、わたしの昏の上に新しい塩をおいて立ち去るだろう。

陽は、いまだその正しい名をよばれたことはない。

イリスはいう——波が風にかぶさった音は、へわたしたちは二人だったことを思い出させると。

III

遠い昔の海の刺繍。化膿する潰れなき開花の時間。

そのような、いわば死海の岸边での幼年期、発熱も憔悴もない泉の上に、棕櫚のうちひらくときがあった。

暁の馬を解き放つ満潮の直前、天空の大橋のねじれが、幼な兎に命令する。

若い女！

死の砂の円蓋のかわりに、ときならぬ絹の海の騎乗。炎の垂直に立った背骨。

行きどまりに、二つの帆柱をかかげた難破船の倒立像。海の極致の青をめぐけて、大地の静脈が走ってゆく。

脂肪の、かぐわしい棲処。

投光器による外科手術。

窓と鏡のはざまにただようイリスの影。

生命のもちまへの色彩が褪せるや否や、手術台の脚は、流れる水の斜面で洪水の光に照り返している。

造船台の孤独の緋色。

天体の帯。

IV

朝、巡礼の人。彼の肉は屠られた。植物と海。花崗岩の浮島。

夏のない母胎の牢獄のなかで壁という壁に幾何学のアナグラムを刻みつけた。そのはるかな直線の記憶の交錯が、白い版図の上にこうした航海の軌跡として甦ったいきさつは、白衣の暗殺者の見開いた二つの眼が、ゆくりなくもたつたひとつの黒に還元された巡礼者の土地に、徒勞の羊歯の生い茂る光景をみとめたからにはかならない。

秋にもかかわらず、暁方のたびに流産してしまう現実。わたしの捨てた胎児。

イリスはいう——巡礼者の墓は、へわたしたちは二人だったことを想い出させると。

わたしが生み落とすことのできるのは、無疵な畸型児。

薔薇の林檎のふとももから、風に吹かれて船は発つ。まどこがその薔薇の薔薇を手にして、龍骨のない巡礼の船。宇宙の不在の中心への進軍——まどこは薔薇の薔薇ファンファーレ！

風。石。火。はぜる棕櫚葉。はためく帆布。船は、こうしてエナメル（エナメル）の海に無名の単純性を繰り出している。

——それだけに、船の暗い夜のことなど誰が知ろう。存在の慎しみ。しかしおそらく、時間のなかでのとらえようのないロカイユの繁殖。白い瀬。シレーヌは水平線に約束の土地をさがす。

いつしか、降りしきる雨。降ってくる哄笑のなかの白茶けた夢。女へのもうひとつの夢は、もはや海の上には見えなかった。イリスはいう——夢の海のひろがりへわたしたちは二人だった。ことを想い出させると。

降ってくる哄笑のなかの白茶けた夢。女へのもうひとつの夢は、もはや海の上には見えなかった。イリスはいう——夢の海のひろがりへわたしたちは二人だった。ことを想い出させると。



さあれ、どもりの水夫の影なき肉体が島に泳ぎつくとき、海は何を与えるか、岸边に向かって駆けよる白馬のほかに。

おお、パトモスの驚の青は魅惑する。

弓をとれ。權は天体に向かって高々とあげよ。

曙をとろかす海。不条理の王。

わたしは、切り裂かれた赤い絹積雲の空で失速し、わたしでない何かであるべく、海の方へ――

まだ処女のままの白地図は、その続きをみるにちがいない。

VII

へわたしたち二人の二重の無意識がそこにいつそう深めている。眺望は、白。降りそそぐエメラルドの黙示。

七つの海と七つの空の陶酔の朝。炎の夜明けと惨劇の日没の巨大な複眼は、(夢の岬)の沖あいに二本マストの船を見いだす。

濡れた甲板に横たわる紫水晶の權。

諸大陸を制覇した船団の凱旋を見るのは、宝石のたそがれ、黄金の驟雨のあとか。

地球には、昔日の名残りの花々が一角獣の火の攻撃に追いやられくずおれてゆく海へのおびただしい傾斜がある。

海原に咲き乱れる花々は往きかう船をことごとく、挫折に災禍に駆りやって、なお、無限の追憶のおとずれがもたらしている極彩色の韻律は、浪費のように花々の霊に捧げられている。

イリスはいう——へわたしたちは二人だった」と。

おお、創世の揺籃期、善徳と白地図。

黒い天使らよ、精神は形なき宇宙に明滅する星々の謂ではなかったか。またそれなら、肉体とは海をわたる一個の日焼けした憔悴ではなかったか。

希望の岬と、黒い血の煮え滾り。海と、系統樹。

砒素のはしけ。

エーテルと水でできた船の永遠。

A 暦

燃えあがる街。陽炎がゆらめき、

いたるところで、砂嵐と龍巻が立つ。

灰となって降りかかる書物。

永遠の水曜日。

le 16 septembre, 1984.

